

教科書のなかの源頼朝像

著者	黒田 智, 石垣 孝芳
雑誌名	教育実践研究 = Studies in practical approaches to education
号	41
ページ	13-20
発行年	2015-10-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/44404

教科書のなかの源頼朝像

Various images of Minamoto-no-yoritomo in textbooks.

黒田 智^{※1}・石垣孝芳^{※2}

KURODA Satoshi, ISHIGAKI Takayoshi

キーワード：肖像画 日本史 人物学習

1、教科書における肖像画

歴史は暗記科目であるといわれて久しい。小学校、中学校、高等学校での歴史教育は、詰め込み型の暗記科目と化している。歴史教科書もまた、限られた紙幅で内容を凝縮しているため、無味乾燥で事実の羅列にとどまってしまうことが少なくない。

それでも、学習者の興味を惹起するために、歴史上の人物や出来事に少しでもリアリティをもたせることがもとめられる。特に、はじめて歴史を学習する小学生にあってはなおさらのことである。そのため、平成元年(1989)の学習指導要領の改訂では、小学校の社会科で42人の歴史上の人物を取り上げ、「人物の働きを通して学習できるように指導する」ことが明記された。この人物学習を重視する要領は、教科書における肖像の掲載傾向にも大きな影響を与えることとなった。

小学校用教科書における肖像の掲載傾向は、平成3年(1991)前後を境に激変した^{*1}。

すなわち、戦後から平成3年(1991)まで、歴史教科書に掲載された肖像の総数は25点程度で、概して微減する傾向にあったが、平成3年(1991)の改訂でほぼ倍増し、現在にいたるまで掲載総数は増加傾向にある。また、その変化の内実をみると、(1)①7世紀から8世紀、②12世紀から13世紀、③16世紀から17世紀へと、掲載された人物の活躍期が重心を移し、(2)女性、外国人、文化人が増加するという特徴を認めることができる^{*2}。

表1は、現行の小学校用教科書において、小学校学習指導要領に明記されている歴史上

の42人の人物の肖像の掲載状況をまとめたものである。掲載総数の激増にともなって、42人のほとんどが掲載されていることがわかる。

表1 小学校用教科書における肖像画の掲載状況

	東京書籍	教育出版	光村図書	日本文教出版	日本文教出版
	新しい社会6上	小学社会6上	社会6	小学生の社会6年上	小学社会6年上
尊号呼					
聖徳太子	○	○	○	◇	○
小野妹子					
中大兄皇子					
中臣鎌足					
聖武天皇	○	○	○	○	○
行基	◇	◇	◇	◇	◇
鑑真	◇	◇	◇	◇	◇
藤原道長	○	○	○	○	○
紫式部	○			△	
清少納言	○				
平清盛	○	◇	◇	◇	○
源頼朝	◇	◇	◇	◇	○
源頼経	○	○	○	○	○
北条時宗	○	○	○	○	○
足利義満	○	○	○	○	○
足利義政	○	○	○	○	○
豊舟	○	○	○	○	○
ザビエル	○	○	○	○	○
織田信長	○	○	○	○	○
豊臣秀吉	○	○	○	○	○
徳川家康	○	○	○	○	○
徳川家光	○	○	○	○	○
近松門左衛門	○	○	○	○	○
歌川広重	○	○	○	○	○
本居宣長	○	○	○	○	○
杉田玄白	○	○	○	○	○
伊能忠敬	○	○	○	○	○
ペリー	○	○	○	○	○
勝海舟	○	○	○	○	○
西郷隆盛	○	○	○	○	○
大久保利通	○	○	○	○	○
木戸孝允	○	○	○	○	○
明治天皇	△	△	△	△	△
福沢諭吉	○	○	○	○	○
大隈重信	◇	○	○	○	○
板垣退助	○	○	○	○	○
伊藤博文	◇	○	○	○	○
陸奥宗光	○	○	○	○	○
東郷平八郎					
小村寿太郎	○	○	○	○	○
野口英世	○	○	○	○	○

※○印…個人の肖像画または肖像写真が掲載。
 ◇印…個人の肖像彫刻が掲載。
 △印…写真などの一部に映り込む形で掲載されているもの。
 平成22年検定、平成26年発行の教科書を元に筆者作成

教科書には実に多くの歴史上の人物が登場することとなり、叙述のある頁の随所にその人物の肖像(絵画や彫刻、写真など)の挿図がちりばめられた。なお、明治時代以前の人物の肖像にあつては、絵画と彫刻の両者が現存する場合があるが、教科書では一般的に絵画が採用される場合が多い。

教科書の肖像画＝視覚教材が学習者に与える影響はきわめて大きい。歴史を学習する際には、歴史上の人物の名前と肖像と事績が重要な要素となる。学習者は、歴史上の人物の肖像画を見て、その人物の性格や生きざまを想像するばかりか、その時代のイメージをかたちづくってしまう場合さえある。

そうした事例のひとつとして、本稿では源頼朝の肖像を取り上げてみることにしよう。

2. 源頼朝像をめぐる論争

京都の北西、高雄山のみもと梅ヶ畑の地にたつ神護寺に三幅の肖像画が伝えられた。

鎌倉末期ころに編纂された『神護寺略記』によれば、仙洞院なる堂舎に後白河法皇、平重盛、源頼朝、藤原光能、藤原業房らの肖像画が安置されていたという。この記事を根拠に、3つの肖像画が13世紀前半に藤原隆信によって描かれた源頼朝、平重盛、藤原光能(桜町中納言藤原成範)であるとする説が、江戸時代以来、流布されてきた。

平成7年(1995)、米倉迪夫氏は、この源頼朝像とされてきた肖像画(以下、神護寺本と略す)が、室町幕府初代将軍足利尊氏の弟直義のものであるとする説を発表した。京都東山文庫に所蔵される康永4年(1345)4月23日「足利直義願文」に、足利直義が自分と兄尊氏の肖像画を神護寺に奉納したことが記されていたからである。この古文書を根拠に、3つの肖像画が14世紀半ばに制作された足利直義、尊氏、義詮であるとする新説が提示されたのである。

それは、康永4年(1345)に足利直義が兄尊氏との政治的安寧を祈願して奉納されたもので、観応2年(1451)の擾乱によっていったん直義が対立する尊氏に勝利した際に、あらたに尊氏の嫡男である義詮の肖像画が制作されて、直義と義詮との二頭政治を祈願して奉納されたものと考えられている。

以来20年、研究者たちによってさまざまな

検証が続けられることとなった。

そもそも神護寺本が13世紀に制作されたことを疑問視する見解は戦前からあった。源豊宗氏や鈴木敬三氏は、①縦143センチメートル、横112センチメートルという巨大な一枚絹の俗人肖像画であり、②座具に大紋高麗縁の2帖分の厚さの上畳を採用している。冠の③纓は纓壺に上から挿入されたためにいったん上がってから垂れ下がり、④一本の長く直線的な筭をもつ点は、14世紀の肖像画の特徴を指し示すとした。

米倉説が発表された後の平成12年(2000)、藤本正行氏は、⑤左腰に紺地の平緒で佩いた金地の毛抜型太刀の柄がみえるが、もともと足利氏の家紋でもある桐紋の飾目貫をもつ飾太刀が完成直前に改変されたものであったことを、昭和56年(1981)の修理をもとに指摘している。また、平成8年(1996)には、黒田日出男氏によって⑥それまで14世紀の制作と考えられてきた大英博物館所蔵「源頼朝像」が18世紀以降の制作であったことが論証され、旧説の根拠がさらにゆらいだ。加えて、黒田日出男氏は、⑦神護寺三像の制作背景を明らかにするとともに、神護寺三像が同寺に所蔵される空海像と僧形八幡神像を描いた「互いの御影」にならったものであることを指摘している。さらに、泉武夫氏は、⑧太い横糸に対して、縦糸は細くて密度も粗い画絹の組成が14世紀に特徴的なものであることを指摘している。

20年の間に、おおむね新説を補強する論考があいつぎ、本図は、14世紀の足利直義像である可能性が高くなった^{*)}。とはいえ、像主確定をめぐる論争は決着をみたわけではない。神護寺本の絵画様式は、いまだに重大な課題として残されているからである。

米倉氏は、「伝源頼朝像」と「夢窓疎石像」のイデオムを比較して言語化し、両作品がともに14世紀半ばの制作であると主張した。これに対して、有賀祥隆氏は、三像のなかでも

「伝源頼朝像」には、他の2像と異なる平安絵画と宋代肖像画の融合が認められるとして、13世紀半ばの成立と推定した。「伝源頼朝像」がもつ孤高の様式をどの時代のもとするべきなのか。高岸輝氏が指摘するように、平安日本や宋元の絵画の系譜をひく「伝源頼朝像」「伝平重盛像」と室町肖像画と共通する要素をもつ「伝藤原光能像」との間には、厳然たる表現上の差異が横たわっている。それは、中世の絵画様式における継承と断絶の両面を象徴的に示している可能性があるのである*。

3、教科書のなかの源頼朝像

それでは、教科書に登場する源頼朝像はどのように変化していったのだろうか。

各校種ごとに教科書における源頼朝像の変遷をたどってみることにしよう。表2・3・4は、1995年以降に改訂をくり返してきた教科書に掲載された源頼朝像の像主名と所蔵者をまとめたものである。

教科書に登場する源頼朝像には、以下の3点がある。簡単に紹介しておこう。

神護寺所蔵「伝源頼朝像」（絵画）

強装束の束帯姿で、冠を被り黒い袍を着け、笏を持って太刀を佩き上畳に坐している。制作年代や像主については先述の通りいくつかの説がある。

さまざまな画像・彫像のうち、現在の源頼朝のイメージを型作ったもつとも著名かつ群を抜いた品格をもつ作品であり、ここに掲げる源頼朝像のなかで唯一国宝指定されている。

東京国立博物館所蔵「伝源頼朝像」（木造）

立烏帽子を被り、狩衣、指貫を着て右手に笏を持って安座する形姿につくられている。寄木造で玉眼を嵌入する。元は彩色像であったと思われるが、現状は黒漆地を呈しており、

保存状態は後述の甲斐善光寺所蔵の像と比べて良好である。

13世紀末から14世紀前半に造立されたと考えられるが、像主名に明証はなく、北条時頼像である可能性が指摘されている。

甲斐善光寺所蔵「源頼朝像」（木造）

強装束の束帯姿で、ほぼ等身大につくられた寄木造の木像。笏を持っていたと思われる右手は欠失し、現状では玉眼は失われているなど、保存状態は良好とはいいがたい。

像内の墨書中には頼朝の没した正治元年（1199）正月13日の年紀があり、最古の在銘をもつ、ほぼ確実な頼朝の肖像であるとされている*。

なお、以下で取り扱う教科書は、原則として出版社名で表記し、同一出版社から2冊以上発行されている場合は教科書名を併記した。また一般的に、教科書が執筆されてから教育現場で使用開始されるまで4年程度を必要とする。①執筆・編集、②教科書検定、③各地区・各学校での採択、④印刷・製本、⑤使用開始というプロセスをへる必要があるためである。そのため、最新の研究成果が教科書に反映されるまでには早くても4、5年程度かかることは注意しておきたい。

4、小学校用教科書

米倉氏の新説が発表されてほどない平成8年（1996）には、すべての小学校の教科書で神護寺本が使用されていた。最初に変化がみられたのは、平成14年（2002）に刊行された東京書籍の教科書である。この東京書籍では、東京国立博物館所蔵の「木造伝源頼朝像」（以下、東京国立博物館本と略す）を掲載した。これは、後述する中学校用教科書、高等学校用教科書を含むすべての教科書のなかでもつとも早い変更例である。また、検定が平成13年（2001）であるから、執筆

表2 小学校用教科書における源頼朝像の変遷

検定年	初版発行	出版社	教科書名	キャプション	所蔵
H7.2.15	H8.2.5	大阪書籍	小学社会	源頼朝	神護寺
H7.2.15	H8.1.20	教育出版	社会	源頼朝	神護寺
H7.2.15	H8.2.10	東京書籍	新編新しい社会	源頼朝	神護寺
H7.2.15	H8.1.10	日本文教出版	日本のあゆみ 小学生の社会	源頼朝	神護寺
H7.2.15	H8.2.5	光村図書出版	社会	源頼朝	神護寺
H11.2.28	H12.2.5	大阪書籍	小学社会	源頼朝	神護寺
H11.2.28	H12.1.20	教育出版	社会	源頼朝	神護寺
H11.2.28	H12.2.10	東京書籍	新訂新しい社会	源頼朝	神護寺
H11.2.28	H12.1.15	日本文教出版	小学生の社会 日本のあゆみ	源頼朝	神護寺
H11.2.28	H12.2.5	光村図書出版	社会	源頼朝	神護寺
H13.1.31	H14.2.8	大阪書籍	小学社会	源頼朝	神護寺
H13.1.31	H14.1.20	教育出版	小学社会	源頼朝	神護寺
H13.1.31	H14.2.10	東京書籍	新しい社会	源頼朝	東京国立博物館
H13.1.31	H14.2.1	日本文教出版	小学生の社会 日本のあゆみ	源頼朝	神護寺
H13.1.31	H14.2.5	光村図書出版	社会	源頼朝	神護寺
H16.3.10	H17.2.7	日本文教出版	小学社会	源頼朝と伝えられる肖像画	神護寺
H16.3.10	H17.1.20	教育出版	小学社会	源頼朝	東京国立博物館
H16.3.10	H17.2.10	東京書籍	新編新しい社会	源頼朝	東京国立博物館
H16.3.10	H17.3.25	日本文教出版	小学生の社会 日本のあゆみ	源頼朝	神護寺
H16.3.10	H17.2.5	光村図書出版	社会	源頼朝と伝えられる木像	東京国立博物館
H22.3.10	H23.2.8	日本文教出版	小学社会	源頼朝と伝えられる肖像画	神護寺
H22.3.10	H23.1.20	教育出版	小学社会	源頼朝	東京国立博物館
H22.3.10	H23.2.10	東京書籍	新しい社会	源頼朝	東京国立博物館
H22.3.10	H23.1.15	日本文教出版	小学校の社会 日本の歩み	源頼朝	東京国立博物館
H22.3.10	H23.2.5	光村図書出版	小学校社会科	源頼朝	東京国立博物館

されたのは平成11年(1999)から12年(2000)ころと考えられる。米倉氏の著書が刊行されたからわずかに4、5年後のことであった。

その後、平成17年(2005)発行の教科書では5冊中3冊と、半数以上が東京国立博物館本を採用している。日本文教出版は神護寺本を使い続けたが、1冊は「源頼朝と伝えられる肖像画」とし、もう1冊ではキャプションを付して「この絵は、別の人を描いたものだ」という説もあります」と明記されている。このころから教科書のなかでも神護寺本の像主名の変更が考慮されはじめていたことがうかがわれる。

現行の平成23年(2011)発行の教科書では、5冊中4冊が東京国立博物館本を使用しており、日本文教出版『小学社会』のみが神護寺本を掲載している。

神護寺本は、小学校用教科書から突如として姿を消したのである。

5、中学校用教科書

続いて中学校用教科書についてみてみよう。

中学校用教科書における頼朝像の変更は、小学校より遅い。平成18年(2006)発行の教科書に、はじめて神護寺本以外の源頼朝像が登場する。

帝国書院は、それまで源頼朝像を掲載していなかったが、平成18年(2006)に東京国立博物館本を掲載して源頼朝であるとした。小学校用教科書では、平成17年(2005)の時点で半数の教科書から神護寺が消えていたのに対して、中学校用図書では平成18年(2006)発行の教科書でも神護寺本が大半を

表3 中学校用教科書における源頼朝像の変遷

検定年	初版発行	出版社	教科書名	キャプション	所蔵
H8.2.29	H9.2.5	大阪書籍	中学社会 歴史的分野	伝 源頼朝像	神護寺
H8.2.29	H9.1.20	教育出版	中学社会 歴史	源頼朝	神護寺
H8.2.29	H9.2.15	清水書院	日本の歴史と世界 中学校 歴史	源頼朝	神護寺
H8.2.29	H9.1.20	帝国書院	社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き 初訂版	掲載なし	
H8.2.29	H9.2.10	東京書籍	新編新しい社会 歴史	源頼朝と伝えられる肖像画	神護寺
H8.2.29	H9.1.25	日本書籍	中学社会 歴史的分野	伝、源頼朝像	神護寺
H8.2.29	H9.1.15	日本文教出版	中学生の社会科 日本の歩みと歴史	源頼朝	神護寺
H13.3.30	H14.2.8	大阪書籍	中学社会 歴史的分野	伝 源頼朝像	神護寺
H13.3.30	H14.1.20	教育出版	中学社会 歴史 未来をみつめて	源頼朝と伝えられる肖像画	神護寺
H13.3.30	H14.2.15	清水書院	新 中学校 歴史 日本の歴史と世界	源頼朝	神護寺
H13.3.30	H14.1.20	帝国書院	社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き 最新版	掲載なし	
H13.3.30	H14.2.10	東京書籍	新しい社会 歴史	源頼朝と伝えられる肖像画	神護寺
H13.3.30	H16.1.25	日本書籍新社	わたしたちの中学社会歴史的分野	伝、源頼朝像	神護寺
H13.3.30	H14.1.25	日本書籍	わたしたちの中学社会	伝、源頼朝像	神護寺
H13.3.30	H14.2.3	日本文教出版	中学生の社会科 日本の歩みと歴史	伝源頼朝像	神護寺
H13.3.30	H14.2.15	扶桑社	中学 社会 新しい歴史教科書	源頼朝像	神護寺
H17.3.30	H18.2.9	日本文教出版	中学社会 歴史的分野	伝源頼朝像	神護寺
H17.3.30	H18.1.20	教育出版	中学社会 歴史 未来をみつめて	伝 源頼朝像	神護寺
H17.3.30	H18.2.15	清水書院	新中学校 歴史 改訂版 日本の歴史と世界	源頼朝	神護寺
H17.3.30	H18.1.20	帝国書院	社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き 初訂版	源頼朝像	東京国立博物館
H17.3.30	H18.2.10	東京書籍	新編新しい社会 歴史	源頼朝と伝えられる肖像画	神護寺
H17.3.30	H18.1.25	日本書籍新社	わたしたちの中学社会歴史的分野	伝、源頼朝像	神護寺
H17.3.30	H18.1.15	日本文教出版	中学生の社会科 日本の歩みと歴史	伝源頼朝像	神護寺
H17.3.30	H18.2.15	扶桑社	中学社会、改訂版 新しい歴史教科書	源頼朝と伝えられている像	神護寺
H21.4.3	H22.2.1	自由社	中学社会新編新しい歴史教科書	源頼朝と伝えられている肖像画	神護寺
H23.3.30	H24.2.8	日本文教出版	中学歴史 歴史分野	伝源頼朝画像	神護寺
H23.3.30	H24.1.20	教育出版	中学社会 歴史 未来をひらく	源頼朝と伝えられる肖像画	神護寺
H23.3.30	H24.2.15	清水書院	新中学校 歴史 日本の歴史と世界	源頼朝	甲斐善光寺
H23.3.30	H24.1.20	帝国書院	社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き	源頼朝像	甲斐善光寺
H23.3.30	H24.2.10	東京書籍	新しい社会 歴史	源頼朝と伝えられる肖像画	神護寺
H23.3.30	H24.2.15	育鵬社	中学社会 新しい歴史	源頼朝と伝えられている像	神護寺
H23.3.30	H24.2.15	自由社	中学社会 新しい歴史教科書	源頼朝と伝えられている肖像画	神護寺

占めていた。キャプションにおいても、「実際の人物に忠実に似せて描く似絵の代表的な作品です」（日本文教出版、『中学社会』）、「鎌倉時代の代表的な肖像画。頼朝像と伝えられている」（清水書院）、「肖像画のことを、当時は似絵といった」（日本文教出版、『中学生の社会科』）などの記載がみられ、神護寺本が源頼朝像であるとして掲載されている。

平成 24 年（2012）発行の教科書になっても、いまだに数多くの出版社で神護寺本が採用されている。ただし、清水書院と帝国書院が、あらたに甲斐善光寺所蔵の木造「源頼朝像」（以下、甲斐善光寺本と略す）を掲載している。とりわけ帝国書院は、前回の検定で東京国立博物館本を新規掲載したばかりで、二転したことになる⁶。帝国書院は、甲斐善光寺本に変更した上で、「鎌倉時代につくら

れたことが確実な、唯一の源頼朝像です」とわざわざ明記していることから、研究動向に対して迅速な対応をしていると評価することができよう。

他の出版社では、概して変更の動きは鈍く、いまだに神護寺本を用いている教科書が多い。とはいえ、平成 18 年（2006）発行時にあったキャプションはほとんど削除され、中学校用の教科書においても次回の教科書検定時には大きな変化がおこることが予想される。

6、高等学校用教科書

高等学校用教科書は、日本史 B における源頼朝像を対象とする。

高等学校用教科書では、平成 15 年（2003）、16 年（2004）発行の教科書から変化がみられる。

まず、平成15年(2003)発行の山川出版社『詳説日本史B改訂版』と平成16年(2004)発行の東京書籍『日本史B』では、これまで掲載されていた神護寺本が削除された。また、平成16年(2004)発行の実教出版『高校日本史B』では、小中高の全教科書を通じて、最も早く甲斐善光寺本が掲載されている

*7. さらに、同年発行の桐原書店『新日本史B』では神護寺本と甲斐善光寺本を並べて掲載し、「ふたつの源頼朝像」として過渡的な掲載方法を採用している。

その後、平成19年(2007)、20年(2008)発行の教科書では大きな変化はない。つづく平成25年(2013)、26年(2014)発行の現

表4 高等学校用教科書における源頼朝像の変遷

検定年	初版発行	出版社	教科書名	像名	所蔵
H9.3.31	H10.3.5	山川出版社	詳説日本史B 改訂版	源頼朝像	神護寺
H9.3.31	H10.3.5	山川出版社	日本の歴史 改訂版	源頼朝像	神護寺
H9.3.31	H10.1.25	実教出版	日本史B 新訂版	源頼朝像	神護寺
H9.3.31	H10.2.15	清水書院	要解日本史B	源頼朝像	神護寺
H9.3.31	H10.2.10	第一学習社	高等学校改訂版 新日本史B	伝源頼朝画像	神護寺
H10.3.31	H11.3.5	山川出版社	新日本史B 改訂版	伝源頼朝像	神護寺
H10.3.31	H11.3.5	山川出版社	高校日本史B 改訂版	伝源頼朝像	神護寺
H10.3.31	H11.2.10	東京書籍	新選日本史B	源頼朝画像	神護寺
H10.3.31	H11.2.10	東京書籍	日本史B	伝源頼朝像	神護寺
H10.3.31	H11.1.25	実教出版	高校日本史B 新訂版	伝源頼朝	神護寺
H10.3.31	H11.2.15	清水書院	詳説日本史B 改訂版	源頼朝像	神護寺
H10.3.31	H11.2.10	第一学習社	高等学校改訂版 精選日本史B	伝源頼朝像	神護寺
H10.3.31	H11.1.25	日本書籍	新版高校日本史B 二訂版	伝源頼朝	神護寺
H10.3.31	H11.3.30	三省堂	詳解日本史B 改訂版	掲載なし	
H14.4.4	H15.3.5	山川出版社	詳説日本史B	掲載なし	
H14.4.4	H15.3.3	明成社	高等学校最新日本史B	伝源頼朝像	神護寺
H15.4.2	H16.3.5	山川出版社	新日本史B	平重盛像のみ	神護寺
H15.4.2	H16.3.5	山川出版社	高校日本史B	伝源頼朝像	神護寺
H15.4.2	H16.2.10	東京書籍	新選日本史B	似絵の貴族像	神護寺
H15.4.2	H16.2.10	東京書籍	日本史B	掲載なし	
H15.4.2	H16.1.25	実教出版	日本史B	伝源頼朝像	神護寺
H15.4.2	H16.1.25	実教出版	高校日本史B	源頼朝木像	甲斐善光寺
H15.4.2	H16.2.15	清水書院	高等学校日本史B	伝源頼朝像	神護寺
H15.4.2	H16.2.25	桐原書店	新日本史B	ふたつの源頼朝像	神護寺・甲斐善光寺
H15.4.2	H16.3.30	三省堂	日本史B	掲載なし	
H18.3.20	H19.3.5	山川出版社	詳説日本史B 改訂版	掲載なし	
H19.3.22	H20.3.5	山川出版社	新日本史B 改訂版	掲載なし	
H19.3.22	H20.3.5	山川出版社	高校日本史B 新訂版	伝源頼朝像	神護寺
H19.3.22	H20.1.25	実教出版	日本史B 新訂版	伝源頼朝像	神護寺
H19.3.22	H20.1.25	実教出版	高校日本史B 新訂版	源頼朝木像	甲斐善光寺
H19.3.22	H20.5.15	清水書院	高等学校日本史B 改訂版	伝源頼朝像	神護寺
H19.3.22	H20.3.30	三省堂	日本史B 改訂版	掲載なし	
H24.3.27	H25.3.5	山川出版社	詳説日本史B	掲載なし	
H24.3.27	H25.3.3	明成社	最新日本史B	伝源頼朝像	神護寺
H25.3.26	H26.3.5	山川出版社	新日本史B	掲載なし	
H25.3.26	H26.3.5	山川出版社	高校日本史B	伝源頼朝像	神護寺
H25.3.26	H26.2.10	東京書籍	新選日本史B	源頼朝像	東京国立博物館
H25.3.26	H26.1.25	実教出版	日本史B	源頼朝像	甲斐善光寺
H25.3.26	H26.1.25	実教出版	高校日本史B	掲載なし	
H25.3.26	H26.2.15	清水書院	高等学校日本史B 最新版	源頼朝	甲斐善光寺

行教科書では、清水書院が甲斐善光寺本を掲載するようになり、東京書籍は東京国立博物館本に変更している。その結果、高等学校用の教科書で神護寺本を採用しているのは、山川出版社『高校日本史 B』と明成社『最新日本史 B』のみとなった。

高等学校の教科書から、神護寺本はほとんど消えたといっていだらう。ただし、源頼朝像が消えたわけではなく、姿を変えて掲載されているという点は注意しておきたい。

むすびにかえて

平成 7 (1995) 年の米倉新説以降、神護寺本に関するさまざまな論考が発表され、源頼朝の肖像に関する研究は飛躍的に発展した。その成果は各教科書にさまざまなかたちで反映されることとなった。以下にその概略をまとめる。

まず、全校種を通じてはじめて変更されたのは、平成 14 年 (2002) の小学校の東京書籍であった。その翌年には、高等学校の山川出版社『詳説日本史 B』から源頼朝像が削除された。平成 16 年 (2004) には高等学校の一部で甲斐善光寺が登場し、平成 18 年 (2006) には中学校の帝国書院で東京国立博物館本が登場した。以降、各出版社は研究動向に沿うかたちで神護寺本の掲載を控える傾向にある。

小学校段階では人物学習が重視されており、肖像画が学習者に与える印象は強い。そのため、比較的保存状態のいい東京国立博物館本が掲載される傾向があり、甲斐善光寺本が掲載された例はいまだにない。現在では日本文教出版『小学社会』以外のすべての小学校用教科書で東京国立博物館本が採用されている。

中学校では、帝国書院のみが神護寺本から東京国立博物館本へ、さらに甲斐善光寺本へと研究成果を忠実に反映させている。だが、他社ではいまだに神護寺本が多く採用されて

いることから、研究成果に対する反応は比較的鈍いといわざるをえない。

高等学校では、神護寺本を比較的早い段階で掲載を取りやめたり甲斐善光寺本に変更したりしている。その点から研究成果を敏感に反映しているといえるものの、現在では後掲の 3 つのパターンが混在している。まさに研究動向の混迷が教科書における肖像の掲載にあらわれているのである。

このように、今回の事例では校種ごとに顕著な傾向がみられ、校種間に関連性は認められない。こうした校種間の断絶は、小・中・高の各校種で違う像を用いて学習するという可能性を含んでいる。そうすると、異なる 3 つの肖像をある 1 人の人物イメージとして学習しなければならない事態さえおこりかねない。校種間における関連性の断絶は、学習者の混乱を招きかねないという教科書作成における課題のひとつを浮き彫りにしている。

しばしば「源頼朝像は教科書から消えた」といわれる。しかし、教科書における源頼朝像の変化には 3 つのパターンがあるのだ。

すなわち、①教科書から頼朝像そのものが消える、②東京国立博物館本や甲斐善光寺本といった他の図版に変更される、③神護寺本を残す、の 3 つである。「教科書から消えた」とされるのは、①のパターンだけを取り上げたセンセーショナルな主張にすぎない。たしかに、③のような神護寺本を残す教科書は徐々に消えており、平成 26 年 (2014) の改訂によって小・高の 2 校種ではほとんど消滅した。現在、大勢を占めているのは、むしろ②のように別の頼朝像に変更した教科書である。①のような掲載を取りやめている出版社であっても、今後の研究動向によっては再登場する可能性があるだろう。米倉説の登場から 20 年をへて、教科書のなかの源頼朝像はいまだ過渡的な様相をみせ続けているのである。

*1片山遼「教科書から見た肖像画 小学生の歴史学習」（金沢大学大学院教育学研究科（修士課程）教育実践高度化専攻編『平成24年度修士論文・修了報告書の概要』2013年）。

*2この改訂では、国際社会における日本を強調する意図があり、外国人の肖像画だけでなく、シャクシャインなどのアイヌ関係の肖像画も登場している。

*3黒田日出男『国宝神護寺三像とは何か』（角川学芸出版、2012年）、黒田智「肖像画の時代」の肖像画（加須屋誠編『日本美術全集』8、小学館、2015年刊行予定）。

*4鹿島美術財団編『第四一回 美術講演会講演録』鹿島出版会 2013年、有賀祥隆「研究余録 国宝 伝源頼朝像雑感」（『国華』1413 2013年）、小川剛生・高岸輝「室町時代の文化」（『岩波講座日本歴史』8 岩波書店 2014年）。

*5黒田日出男『源頼朝の真像』（角川学芸出版、2011年）。

*6これは筆頭著者が黒田日出男氏であるためであると考えられる。

*7前掲注5の帝国書院よりも8年早い。中世史の執筆担当者は川合康氏、峰岸純夫氏、佐藤和彦氏。